

伊庭内湖におけるホンモロコ稚魚の生息状況

片岡 佳孝・石崎大介

1. 目的

伊庭内湖では、ホンモロコ資源が回復傾向にあり、伊庭内湖内で成育した稚魚が琵琶湖へ移動し、琵琶湖における漁獲にも貢献していることが分かっている。それを受けて、産卵期に伊庭内湖に進入してくる親魚保護のために、関係する漁業協同組合等の合意をもとに刺網などによるホンモロコ漁業を禁止する琵琶湖海区調整委員会指示が平成 24 年以降例年出されている。禁止期間は、平成 24 年度が 4 月 1 日～30 日、平成 25 年と平成 26 年度は 4 月 16 日～5 月 15 日のそれぞれ 1 ヶ月間であった。

禁漁の効果を評価するために伊庭内湖(大同川を含む)内のホンモロコ稚魚の生息状況を調査した。

2. 方法

調査は、平成 27 年 5 月 28 日から 9 月 28 日にかけて計 9 回行った。伊庭内湖(大同川を含む)に 13 地点を設定し、ビームトロール網(小型底引き網)によりホンモロコ稚魚を採集した。採集した標本は氷冷して持ち帰り、後日ホンモロコ稚魚数を計数した。各地点の生息密度(尾/m²)を採集尾数(尾)/曳網面積(m²)として算出し、それらの平均値を伊庭内湖内の稚魚生息密度の指標とした。曳網面積はビームトロール網の間口(m)×曳網距離(m)として算出した。

3. 結果

調査期間中の平均生息密度(±標準偏差)は 0.53±0.58 尾/m²(5/28)、1.1±0.85 尾/m²(6/11)、0.24±0.26 尾/m²(6/26)、0.06±0.14 尾/m²(7/8)、0.03±0.06 尾/m²(7/22)と推

移し、8 月以降ほとんど採集されなくなった(図 1)。生息密度のピークは、6 月 12 日の調査であった。

生息密度の推移から、伊庭内湖で成育した稚魚は 7 月上旬までには琵琶湖へと移動したと考えられた。

伊庭内湖は、水門により水位管理されており、水門の開閉がホンモロコの移動に影響を与える。本年度については、順調に琵琶湖へと移動できたと考えられた。

今後の伊庭内湖内におけるホンモロコの資源管理のためには、現在の漁業禁止期間の有効性を評価する必要がある。伊庭内湖内のホンモロコの産卵は 3 月から 7 月頃まで続いたため、資源形成に最も影響のある産卵時期を把握し、その時期を中心とした禁漁期間を設定する必要がある。そのためには、伊庭内湖内で成育するホンモロコ稚魚のふ化日組成を日齢査定により把握することが必要である。

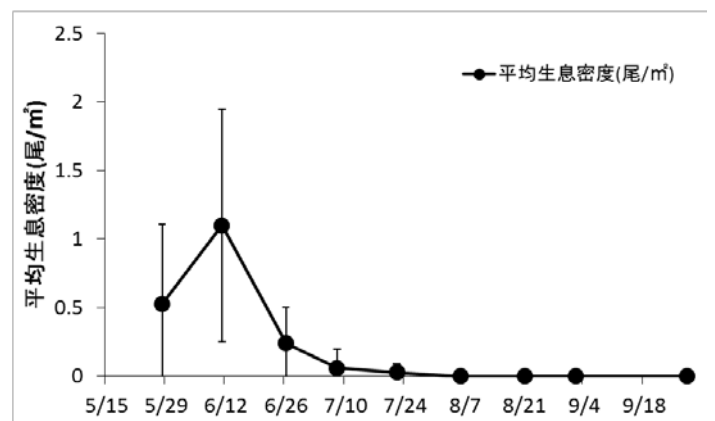


図 1 伊庭内湖(大同川を含む)13 地点の平均生息密度(尾/m²)の変化